

# 銀の輔と歩く

初めて銀の輔と深川川隈、江東区内を歩きだしたのはいつ頃だろうか？白河の同潤会アパートでは確実に撮っているんだけど、どうしてもネガが見つけられなくて…。古式床しい建物群の一角に銭湯があって、壁一面に視力検査表が描かれてた。つるの湯だっけ？階上に本格的な演芸場が設えられてて、ここで後輩達と素人演芸会をしたな。

牡丹町の親水公園沿いにあった集合住宅もなかなか年季が入ってた。僕は外置きの水飲み場が好きなんだ。そうそう、この近くに長年お世話になり続けているタウン誌・深川の編集部がある。東富橋の袂の一室で、季節に窓から桜が見える。

お気に入りの食糧ビルは、お気に入りの最たるものだった。美しいタイルの外観も、使い込まれた屋内も、外からは窺い知れない中庭の雰囲気も好きだった。アーチ型の入り口の影に、何故か漫画下カベンの巨大人形が置いてあった。時にはロケにも出会って、軍服姿の若者数十人が整列してる光景には、一瞬タイムスリップした気持ちに陥った。そして雪景色の美しさといったら…。

あなたとわたしの  
演芸の友  
**東京かわら版**  
毎月二十八日を待て

毎月10日ごろ出ますよ

本の雑誌

江東区の楽しい  
美味しい情報がいっぱい  
タウン誌  
**深川**  
Town Magazine Fukagawa

イラスト・デザイン  
いろいろやります  
白玉社  
siratamasya

編集後記のようなもの  
今回はオール江東区という超変則スタイルになりました。深川図書館の講演会の講師など何とも分不相応な事をを仰せつかったもので、そのレジュメを兼ねて、Pしんぶんも作っちゃう横着な所業にしてみました。資料探しはいい加減、記憶にはある写真が見つからなくて杜撰極まりないんですが、まあ杜撰&軽率はいつものことなのでお許しください。そして江東区を激歩するきっかけを作ってくれたタウン誌・深川に感謝します！



## 今年も永代を渡ります

気が付くと永代橋を渡って清洲橋も好きなのに、この橋を渡らないと、何だか深川散歩をした心持ちにならないんです。散歩界の巨匠、かの荷風先生も足繁く渡ったんだと思うと、余計にね。

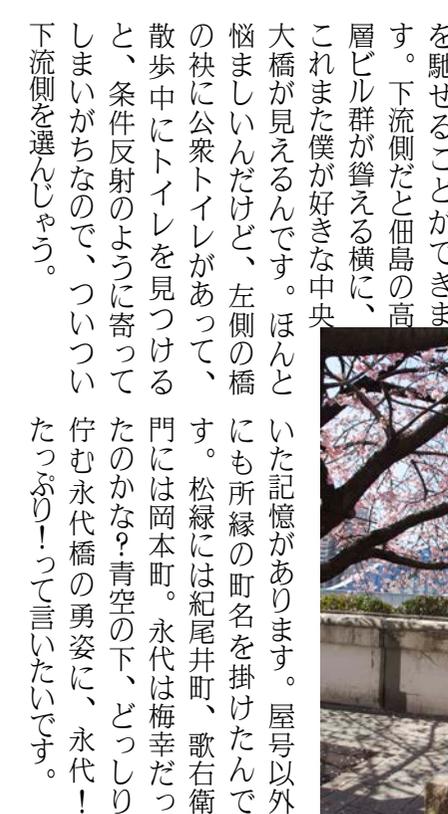
でも春になると、上流側が気になります。橋の袂の交番の裏、小さな公園に桜の木があるんですよ。今は随分剪定したけど、以前は立派な枝が思い切り伸びて、咲き誇る桜の向こうに永代橋の優雅な姿が見えて、今思い出しても溜息が出ます。

永代橋です。もしくは、問題はどうち側を歩くか？ 門前仲町をふらふら、佐賀町です。新川方面に向かう時に、上流側だと隅田川大橋の先に清洲橋の先っぽがちょこっと見えて、その向こうにスカイツリー、本所や浅草に想いを馳せることができます。下流側だと佃島の高層ビル群が聳える横に、これまた僕が好きな中央大橋が見えるんです。ほんとに悩ましいんだけど、左側の橋の袂に公衆トイレがあって、散歩中にトイレを見つけたの、条件反射のように寄ってしまいがちなので、つつい下流側を選んじゃう。

す。松緑には紀尾井町、歌右衛門には岡本町。永代は梅幸だったのかな？ 青空の下、どっしり佇む永代橋の勇姿に、永代！ たっぷり！ って言いたいです。



版元：東京ペンギン堂本舗  
豊島区北大塚2-26-1-1F



コチョウズレドモ  
ウソハツカナイ

## 埋立地からモダン都市へ

有明を歩き始めた理由が思い出せない。晴海や芝浦や品川の埠頭界隈の異景が面白くなって、その延長かも知れない。倉庫街の晴海から廃墟っぽい古ぼけた倉庫が並ぶ豊洲にかけて、信号が極端に少なかったので、その頃中型バイクに乗っていた僕には、恰好のライディングコースだった。銀座から一〇分も走ったら、こんな別世界が広がっていた。しかも倉庫街の休日はゴーストタウン。軟弱シテイライダーには最適な場所だった。ちよつとした空き地や袋小路のどんつきには、粗大ゴミが山積み、



はゴーストタウン。軟弱シテイライダーには最適な場所だった。ちよつとした空き地や袋小路のどんつきには、粗大ゴミが山積み、



草茫々の更地には背の高いススキが沢山自生してて、秋にはススキ狩りにも行った。無断違法駐車ともしき車もあちこちにいる、野犬に遭遇したのには驚いた。既に臨海副都心の工事は始まっていて、簡易舗装した道路には走り屋たちが自慢のバイクで爆走し、ギャラリーもいたし、陰にはパトカーもいた。コンテナヤードの隅っこのは、おじさんたちが釣り三昧。バイクを手放した途端、湾岸を訪れることはなくなった。長い空白期間ですっかり忘れていた有明が、いきなり目の前に飛び込んで



来た。臨海副都心の第一期完成だ。幾つかのビルは竣工したけど入居も利用もまだ先、ニュース映像を見て行かねばと思った。何もなかった埋立地に出来た、誰もいない近未来的な建物を見たいと思った。雑草だらけの広大な更地も異空間だったけど、人工物で囲まれた無人の街は、それに勝る不思議な世界。誰もいないけど自動ドアは可動し、エスカレーターも動いている。生命反応のない真つ暗闇の中で、全照明が無駄に輝き、そこだけ屋間みた。雪中の風景は終末感さえ漂う。異景は時代を経ても健在だった。



## 東陽町じゃない顔を求めて

僕の中の洲崎は三つの顔がある。広重と野球場と川島雄三だ。洲崎十万坪は江戸の初期に幕府が新田開発で造成した埋立地で、そのまま砂村（砂町）まで続いていたらしい…ってな小難しいことは分からないけど、歌川広重の名作にやられた。空高く飛ぶ大鷲から俯瞰した洲崎を、どうやって描いたんだろう？ドローンもないのに。岡本綺堂の半七捕物帳にも登場する。半七親分が解決した江戸が舞台の話は、全部歩いたもの。

若い頃は躍動感溢れる国芳や破天荒な北斎、エキセントリックな芳年たちが大好きだったけど、写真撮るようになって、広重の構図の素晴らしさが心に響く。あの



本を読んだんだ。突貫工事で拵えた職業野球専用球場があったんだと。スタルヒンの本かな。僕が憧れる伝説のスラッガー景浦将やそのスタルヒンも活躍した。沢村栄治も投げたという。界隈の工場で働く工員さんが、城東電車に乗ってやってくる下町スタジアムだ。城東電車といえば、カメイドクロック脇にちよこつと残る軌道跡がそうだと思ふ。きつとこの路線が洲崎まで続いてて、後に都電になったんだ。東京湾が満潮になると水浸しになり、時には蟹が歩いてたって、なんと長閑な野球場だろう。こんな悪条件の中で、球史に残る名選手たちが凌ぎを削り、若きエネルギーを燃やしていたのかと思うと、胸が熱くなる。そして洲崎球場は蟹気楼の如くサツと消えた。



やはり洲崎パラダイスを思い出してしまふ。発端は根津遊郭の移転先として明治時代というが、僕には川島雄三のあの風景が離れない。そう思って歩き始めた頃は、まだ少しかだけ名残りがあった。不思議な建築様式の八百屋さんクリーニング屋さん、タイル張りの円柱が玄関先を支える政党支部。弁天アパルトメントのあったし、弁天町という町名プレートもあった。出向く度に更地と新築が増え、洲崎神社近くの大好きな新田橋も架け替えられた。この街はどうなっていくんだろう？江戸の埋立地は、既に歴史がミルフィーユの如く折り重なっているんだ。



バックナンバーはこちらです！  
